

西国第一番 那智山

御本尊／如意輪観世音菩薩 開基／裸形上人

天台宗 青岸渡寺

心に補陀落渡海を

山主 高木亮英

当地方熊野には「補陀落渡海」という宗教儀礼がありました。南方に在るといふ補陀落浄土（観音浄土）を目差し、幾許かの食料、水、油を積み、補陀落山寺の住職が命をも顧みない強い信仰のもと、観音様のお浄土に到達すべく、那智の浜辺より船出しました。その行為には、あらゆる人々の救済の意味も込められていたでしょう。その歴史は古く、

貞観十年（868）から始まり、江戸時代中期まで続いたと記録に残っています。最初の頃は生身の住職が一人で船出したと言われ、やがて補陀落山寺の住職に付随う同行者もあらわれました。江戸時代中期には補陀落山寺住職が亡くなると、その亡骸を渡海船に乗せて船出させるといふ、一種の水葬に形を変えて行きました。

本来、我々は「観音様の御心」（思いやりの心・優しさの心・慈しみの心）を持っていますが、日々の生活をしておりますと様々な人間関係や社会のしがらみによって、「観音様の御心」は薄らいでゆきます。それは、我々には「自分さえ良ければ 自分を中心に」と自分に執着して物事を考え、行動し、判断する煩惱というものが存在し、これによっていろいろな悩み・愚痴・怒り・妬みが生じて来るからです。

現代社会にあつては親が幼い我が子を虐待してその命を奪ったり、大国が自国の領土を拡大せんが為に他国に侵攻し、何の罪もない人々の命を蔑ろにする悲惨な事態が生じています。世知辛く見苦しい世間、苦海にあつて、西国三十三ヶ所を通して是非「観音様の御心」、思いやりの心、優しさの心、慈しみの心を蘇

らせ、その御心に近づいていただき、知って頂き、また知らしめて頂き、平和で和やかな明るい社会に船出する「心の補陀落渡海」を目指していただきます。

「南無大慈大悲観世音菩薩」世の中の音、我々の願い、苦しみをお聞き届けくださるのが観音様であります。

